

のミスはカバーできるが中盤以降はミス無く直線的なライン取りをしないと速いタイムは望めないというコース戦略が明らかとなった。この後の1月後半の直前強化合宿ではこの点を選手に徹底的にたたきこんだ。

4) 直前合宿（1月後半、たいらスキー場、イオックスアローザスキー場）

直前合宿では主にGS中心に分析を実施した。このときはダートフィッシュの時計機能を用いて、先の急斜面における旗門間の所要時間を計測した。

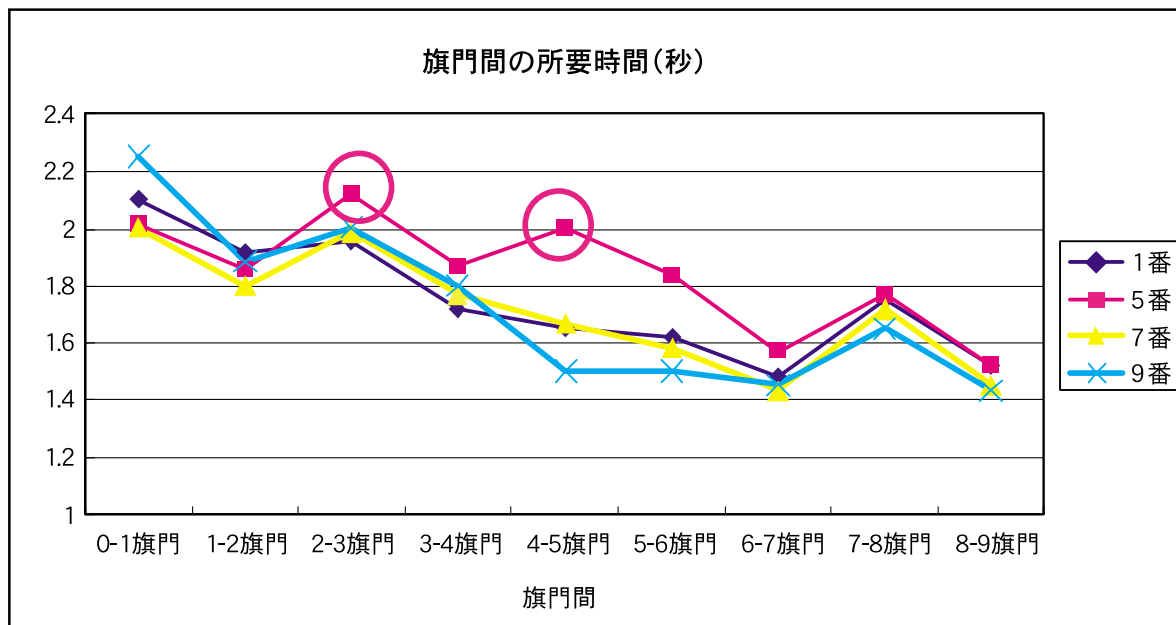


図13 直前合宿における旗門間の所要時間

図13はたいらスキー場の急斜面でのトレーニングにおける旗門間の所要時間を選手毎に比較したものである。計測を開始した旗門を0旗門とし、その後各旗門間の所要時間をプロットしていった。グラフでは折れ線が下に行くほどタイムが速いことになる。このような計測をすることでどの旗門でタイムロスをしたかが明らかとなった。また5番の選手は2-3旗門および4-5旗門でタイムロスをしているが（図中に○で表示）、これは同じ側のターンでタイムロスをしていることを示している。ビデオ画像と照らし合わせるとこの選手は左側のターンに問題があることがわかった。このように旗門間の所要時間とコースプロフィール（急斜面か緩斜面、左右のねじれ）、旗門の特徴（オープンかクローズドゲート）、ターンの映像を組み合わせることにより選手個人の技術を詳細に調べることが可能になると思われる。なお、このような分析データは計測したその日の内にすべて選手にフィードバックした。これでインターハイを前にして、少なくともGSに関してはコース戦略、個人の滑りの詳細な分析等必要な情報を示すことができた。

ところで合宿では同じポールセットを何本も滑ったわけであるが、ほとんどの選手が最初の1本目のタイムが1番良かった。実際のレースを考えると最初の1本目でベストタイムが出るのは好ましいことかも知れない。しかしながら、同じセットを何本滑ってもタイムが向上しないというのはトレーニング効果という点では疑問の残るところである。この点に関しては今後の検討課題と言えるかも知れない。

5) インターハイ（2月上旬、たいらスキー場、イオックスアローザスキー場）

インターハイは天候にも恵まれ良いコンディションでレースをできたと思われる。富山県で